

思考実験入門

世界五分前仮説から
ギユゲスの指輪まで

前田圭介

トロッコ問題、水槽の脳、無知のヴェール…

哲学のエッセンスを凝縮した

思考実験を
一挙34題収録!

クイズ感覚で楽しく身につく哲学入門

思考実験入門

世界五分前仮説からギュゲスの指輪まで

前田圭介

星海社

296



SEIKAISHA
SHINSHO

みなさんは「トロッコ問題」をご存じですか？

「制御の効かないトロッコが、今、五人の作業員を轢ひこうとしている。あなたは進行方向を切り替えるレバーを引くことができるが、もしあなたがレバーを引けば、今度は切り替えた先にいる別の作業員一人が犠牲になってしまう。さて、あなたはレバーを引くべきだろうか、それとも引くべきでないだろうか？」という思考実験です。

もしかすると「学校の授業で聞いたことがある」という人もいるかもしれませんが。NHKの『ハーバード白熱教室』というテレビ番組で政治哲学者のマイケル・サンデルがトロッコ問題を取り上げたことからブームに火が付き、今や日本人の大部分が知っている有名な思考実験になりました。

ですが、トロッコ問題を知っている人でも、「この思考実験は、どのような問題を提起するために作られたものなのか」「この思考実験を作った人は、どのような問題意識を持ち、

どのような思いでこの実験を考えたのか」といったことまで知っている人は意外と少ないのではないでしょうか。同様に、他のさまざまな思考実験についても「その問題を考えることに、どのような意味があるのか」があまり意識されていない現状があります。

そもそも、「思考実験」とは何なのでしょうか？

思考実験とは、実際の器具や薬品を使う一般的な実験とは異なり、想像上のシミュレーションをして、頭の中だけで完結する実験のことを指します。さきほどのトロツコ問題のように、悩ましい状況を仮定して考えてみる人が多いです（こうした悩ましい状況を「モラルジレンマ」と言うこともあります）。そして、悩ましい状況に対して「どちらが正しいんだろう?」「自分はどちらの方が納得できる?」「これってどんな結果になるんだろう?」と様々な角度から検討するうち、哲学的な問いに対して自分の意見を持てたり、自分の価値観の根本に気付いたりできるようになります。つまり、思考実験というものはただ「考えて面白い」だけではなく、自分が持っている価値判断の軸に気付くための、そして哲学上の問題や現代社会の問題を考えるためのヒントを与えてくれるのです。

そこで本書では、数多くの思考実験に加え、実際に行われた興味深い実験、多くの人が

悩むシチュエーションなどの「悩ましい状況」も取り上げ、その状況に対してどのような見方ができるのかを紹介します。「悩ましい状況」を説明するだけでなく、考察の過程で見えてくることや過去の哲学者が考えていたことについても書いています。

ただし、ひとつだけ注意しておきたいことがあります。この本では、様々な思考実験や「悩ましい状況」に対して明快な答えを提示しているわけではありません。本書を読み進める中で、かえって頭が混乱してしまうこともあるかもしれません。ですが、それで構わないのです。悩むということは、様々な可能性を検討し、複数の選択肢を比較し、各々の立場に立つて思考することです。この過程を、本書でみなさんと共に体験できればと思っています。

「悩む」という過程は、私たちが変化の激しい社会を生き抜いていくうえで特に重要になるものだと確信しています。

難しい選択を迫られたときに、ノリや勢いで決めてしまい、後悔した経験はありませんか？ なぜそういうときに後悔するのかというと、きちんと悩まなかったからですよね。「どうしてあっちを選んでしまったのか、少し考えればこっちにすべきだとわかったのに」と後悔したのであれば、それは十分に悩まなかったことが原因です。逆に、自分の中でき

ちんと悩んだうえで納得して選んだ道なのであれば、「あの時はこの選択がベストだった」と前向きに振り返ることができません。だからこそ、「悩む」という過程をトレーニングするために本書を活用してもらいたいと考えています。

本書に掲載した34のトピックについて、反射的に結論を出そうとするのではなく、じっくり向き合ってみてください。実際に自分だったらどう考えるかを悩んで、自分なりの結論を出そうと試みてください。納得いく結論が出なければ、一度本を閉じて自分の思考の過程に思いをめぐらせてみるのもいいでしょう。そして、自分の中に生じた変化や揺らぎ・迷いを大事にしてください。そうすれば、皆さんは本書を上手に活かすことができると思います。本書を手にとってくださった皆さんは、思考実験のプレイヤーなのです。

第1章では、有名な思考実験と実際に行われた興味深い実験を20個取り上げています。どこから読み始めてもらっても構いません。思考実験や心理学実験を通して先人は何を問おうとしたのか、そして何が明らかになったのかを皆さんと考えていきます。先人の考え方に対して「いや、自分はこれでは納得しないな」とツツコミを入れてみるのもいいでしょう。

第2章は、第1章で得た考え方を使ってみる実践パートです。現代社会で起こっている「悩ましい状況」とそれにまつわるキーワードを14個取り上げています。第1章で取り上げたトピックは過去のものが大半なのに対し、第2章ではわれわれが現実に直面している問題について考える「応用倫理学」のトピックを多数紹介しました。第1章よりも判断に迷う場面が多くなるかもしれませんが、トレーニングだと思つて焦あせらず読み進めてみましょう。

なお、この本は哲学や思考実験に興味のある人全般を読者として想定していますが、高校で学ぶ「公共」や「倫理」の授業にもきつと役立ててもらえるはずです。中学生や高校生の方も、ぜひ肩の力を抜いて本書を読み進めてもらえればと思います。

それでは、『思考実験入門』スタートです！

第1章 哲学がわかる 思考実験 20

13

- 思考実験 1 メアリーの部屋 感覚は物理学で解明できるか？ 14
- 思考実験 2 囚人のジレンマ ゲーム理論とは何か？ 21
- 思考実験 3 シュレディンガーの猫 二つの状態が同時に存在する？ 28
- 思考実験 4 テセウスの船 ものの同一性を決めるのは何か？ 33
- 思考実験 5 デーモン仮説 すべてを疑ったとき、正しいと言えることは何か？ 39
- 思考実験 6 水槽の脳 この世界は本物がフィクションか？ 45
- 思考実験 7 ビュリダンのロバ 合理主義が生むパラドクス 49

- 思考実験 8 カルネアデスの板 自分を守るために他者を見捨てていいのか？
 思考実験 9 全能のパラドクス 全能者は自らの能力を制限できるか？ 60
 思考実験 10 ギュゲスの指輪 不正な利益を得て幸せになれるか？ 64
 思考実験 11 無知のヴェール 自分の立場を忘れると人の考えはどう変わる？ 68
 思考実験 12 砂山のパラドクス 砂山から一粒ずつ減らすと、いつ砂山でなくなる？ 73
 思考実験 13 トロツコ問題 一人を助けるか、五人を助けるか？ 78
 思考実験 14 世界五分前仮説 その「記憶」が偽物でないとどう証明する？ 84
 思考実験 15 スタンフォード監獄実験 人は立場でどう行動を変えるか？ 89
 思考実験 16 アイヒマン裁判 なぜ平凡な人間が悪事を働いてしまうのか？ 94
 思考実験 17 ユニバーズ25 豊かになりすぎた世界は崩壊する？ 99
 思考実験 18 アキレスと亀 なぜ現実にはありえない計算が成立するのか？ 104
 思考実験 19 インビジブルゴリラ 見えるはずのものが見えなくなる謎 109
 思考実験 20 哲学的ゾンビ あなたの友人がゾンビでないとなぜ言える？ 114

第
2
章 現代社会のキーワードがわかる **思考実験 14**

119

- キーワード **1** 認知バイアス 120
- キーワード **2** アファーマティブアクション 125
- キーワード **3** 安楽死 130
- キーワード **4** エンハンズメント 136
- キーワード **5** 公衆衛生 140
- キーワード **6** 自国民第一主義 145
- キーワード **7** 監視社会 149
- キーワード **8** ポストトゥルース 154
- キーワード **9** 未来倫理・世代間倫理 158
- キーワード **10** 戦争倫理学 163

キーワード **11** 道徳的行為者 167

キーワード **12** 動物倫理 172

キーワード **13** インフォームドコンセント 177

キーワード **14** 反出生主義 183

おわりに 188

本書を読み終わった人のためのブックガイド 190

第1章

哲学がわかる

思考 実験 20

思考実験 1

メアリーの部屋

感覚は物理学で説明できるか？

概要

メアリーは、生まれたときから特殊な状態で部屋に入れられています。世界が白黒にし

か見えないゴーグルをつけており、そのゴーグルの影響で部屋のすべてのものが白と黒に見えるのです。

メアリーは、色に関する物理的なあらゆる専門知識を持っています。夕焼けやリングゴが赤く、海や空が青く、レモンやバナナが黄色いことを知識として知っています。色の原理や光の特性、眼球の構造、網膜の仕組み、さまざまな色を作り出す方法も知っています。でも、その色を実際に見たことは一度もないのです。

そんなメアリーが、ある日ゴーグルを外して部屋の外に出ることになりました。知識でしか知らなかった空の青を、自然の緑を、夕焼けの赤を、実際に目で見て体感したのです。

さて、初めて部屋の外に出て色を見たとき、メアリーは何か新たな学びを得るでしょうか？ それとも、既に知識としては知っているから新たな学びや発見は何もないのでしょうか？

背景

この思考実験は、一九八〇年代にフランク・ジャクソンという哲学者によって考案されたものです。当時は「あらゆる物事は物理的である」とする物理主義の立場が有力で、人間の心についても「脳のことがわかれば心も分かる」と考えられていましたが、心の哲学の研究者であるジャクソンはこの考えに反論するため「メアリーの部屋」の思考実験を提示しました。

この思考実験では、「クオリア」の存在が問われています。クオリアとは主観的な意識に現れる感覚的なものを指す概念で、「質」という意味のラテン語に由来します。例えば、赤いリングを見て赤いと感じるときの「赤い色の感じ」がクオリアに相当します。その他、リング独特の香りや手触り・酸味など、視覚以外の知覚や感覚にもクオリアは現れます。美しい景色を見て「綺麗だなあ」と感じたり、いい香りを嗅いで心が安らいだりした経験は誰しもあるでしょう。そうした人々の自然な感覚に訴えることがジャクソンの狙いでした。ジャクソンは、メアリーが部屋の外に出たときに得るであろう感覚的なものをクオ

リアという概念で表現することで、「人間の主観的な感覚は、科学的知識では説明しきれないのではないか？」という疑問を投げかけたのです。

物理主義の立場からは、この思考実験に反論も向けられています。例えば、「メアリーは色に関する物理的なあらゆる専門知識を持つ」という設定ですが、その専門知識の中にクオリアも含まれるはずだ、という意見が出ました。その場合、「実際には何も新しいことは学ばないだろう」という主張も成り立ちます。著名な哲学者であるダニエル・デネットなども、同様の主張をしています。

以上のように、この思考実験は「人間の中に現れる感覚とはどのようなものか」と問いつけ、多くの議論を喚起^{かんき}してきました。

考察

ここまでの議論を抽象的で現実離れたものだと感じた人もいると思いますが、この思考実験が提起する問題の重要性はAI（人工知能）の発展が著^いしい現代において増^ちしている

ます。

一つ目は、クオリアをめぐる問題です。将来、感覚の仕組みが完全に解明され、五感を模倣^{もほう}できるロボットが開発されたとしましょう。では、この優秀なロボットは人間と何が違うのでしょうか。

現時点でのロボットは、例えば「赤い色の感じ」を受け取ることではできません。それが人間とロボットを分ける違いの一つでもあります。人間は身体を持ち、身体そのものを通じて世界と関わる存在だからこそ、クオリアを受け取ることができるのです。もし今後ロボットが五感を外形的に模倣できるようになったとしても、感覚そのものを持つていないわけではないため、クオリアを受け取れるようになることはまずないでしょう。

二つ目は、「物理的なあらゆる専門知識を持つ」という設定の妥当性についてです。人間は言葉の意味を辞書的に理解するだけでなく、意味を状況に応じて拡張することができます。例えば、「椅子に座る」ことを考えてみましょう。最新の画像認識技術を用いれば、椅子とそうでない物体を判別できるロボットを作り、ロボットを椅子に座らせることは可能です。しかし、時に人は机に座ることもあれば、山登りの最中などには石に座ることもあります。一方で、ロボットにどれだけ機械学習をさせても、机や石を「椅子」とは認識で

きないでしょう。このように、人間は文脈の中で新たな意味を見出すことができるため、「物理的なあらゆる専門知識を持つ」人間の存在は、現実には考えにくいといえます。

「近い将来、シンギュラリティが到来して人間はAIに支配される」と言われることもあります。シンギュラリティとは「技術的特異点」とも言われ、コンピューターが人間の能力を追い越す瞬間を言い表す概念です。しかし、人間には身体を通じて言葉の意味を捉え、さらにその意味を拡張する力があります。人間がロボットにはないクオリアを受け取れることの意義を、この思考実験は示してくれています。

応用

哲学の分野では、この思考実験をきっかけに、クオリアをめぐる議論が盛んになりました。デイヴィッド・チャーマーズが提示した「哲学的ゾンビ」（「思考実験20」参照）は、今回の「メアリーの部屋」を発展させた思考実験になっています。日本でも茂木健一郎がクオリアの研究を進めています。

また、同時期に認知科学の分野でも同様の議論が提起されました。この分野では、身体的な経験を持たないAIが言葉の真の意味を理解できないことを示すために、ステイブロン・ハルナッドが「記号接地問題」を提唱しました。一方で、AIは言葉の意味を真に理解していなくても知能があるように見せかけて応答することができてしまいます。この問題は、ジョン・サールが「中国語の部屋」という思考実験で提起しているものです。

思考実験 2

囚人のジレンマ

ゲーム理論とは何か？

概要

二人の囚人 A と B は、ある犯罪に関連した別件容疑で警察に捕まりました。罪を犯した

可能性は高いものの、決定的な証拠がないため、二人は別々の部屋で尋問じんもんされています。

そこで、警察は尋問するにあたって、二人の囚人にそれぞれ「自白する」「自白しない」の二つの選択肢を与えました。両者とも自白しない（＝黙秘もくひした）場合は共に懲役一年、両者とも自白した場合は共に懲役五年となります。一方のみが自白した場合は、自白した方のみ釈放しゃくほう、自白しなかった方は懲役十年となってしまいます。

さて、囚人AとBがこの話を持ちかけられたとき、二人はそれぞれどのような行動を取るでしょうか？

背景

この思考実験は、一九五〇年にランド研究所のメリル・

囚人A

	自白する	自白しない
囚人B 自白する	A、Bともに懲役 5年	Aは懲役 10年 、 Bは釈放
自白しない	Aは釈放、 Bは懲役 10年	A、Bともに懲役 1年

「ナッシュ均衡」

両者にとってベストではない選択でも、一度選択してしまうとそこから抜け出せなくなり均衡してしまうこと

図1 利得表

フラッドとメルビン・ドレッシャーが行った心理実験に着想を得て、ランド研究所の顧問であったアルバート・タッカーが定式化したものです。

「囚人のジレンマ」は、ゲーム理論という経済学の分野における代表的な思考実験として知られています。ゲーム理論とは、複数の主体が互いに相手の出方を読みながら最善手を選んでいく状況（戦略的状況）を数学的に定式化したもので、消費者や企業の行動をチェスのようなゲームに見立てて分析することからこの名前が付いています。20世紀後半にゲーム理論の研究が進む中で、囚人のジレンマも有名になっていったため、今では「ゲーム理論」と言えば囚人のジレンマ」というイメージを持っている人も多いのではないのでしょうか。

それまでの伝統的な経済学では主に、無数の消費者と企業がいる市場（完全競争市場）で、与えられた市場価格の下で消費者と企業が自らの利益を最大化するためにどう行動するかを分析していました。おおざっぱに言うと、各人が自己利益のみを考えて合理的に行動すれば社会全体の利益も最大になる、というのが伝統的な経済学の考え方です。

しかし、伝統的な経済学の理論では完全競争以外の問題を分析できないことが次第にわかってきました。例えば、ライバル企業に勝つためにどう行動するかを分析したい場合、自社にとって何が利益につながるかはライバル企業の出方次第で変わってしまいます。こ

の場合、「自己利益のみを考えて合理的に行動するのが正解である」というだけでは不十分で、「相手の出方をどう読むか」を分析する理論が新たに必要になります。そのため、より広範な経済の問題を分析するために、二十世紀後半から「相手の出方をどう読むか」を体系的に取り扱うゲーム理論の分野が発展し、経済学全般に対して大きなインパクトを与えました。

現在では、経営学・政治学・社会学・心理学・哲学・生物学・コンピューターサイエンスなど、他の多くの学問領域にもゲーム理論の考え方が応用されています。

考察

「囚人のジレンマ」の思考実験は、どのような結果になると考えられるでしょうか。

囚人Aの立場に立って考えると、Bがいずれの戦略を取った場合でも、黙秘するより自白した方が短い刑期で済むため、Aにとっては自白する方が得だと言えます。同じく囚人Bの立場でも、Bは自白する方が得となります。つまり、互いが自分にとって得になる方

を選ぶと、「両者とも自白し、二人仲良く懲役五年になる」という結果が待っています。

さて、この結果は最善なのでしょうか？

互いに黙秘すれば二人とも懲役一年で済むので、当然それが最善の選択です。しかし、別の部屋にいる相手を信じて、黙秘を選ぶことは可能でしょうか。相手に裏切られ、黙秘した自分だけが懲役十年になってしまう可能性もあります。そのリスクを恐れるのであれば、「裏切られる前に裏切ってしまう」と損得勘定で考え、自白する方が自然でしょう。「裏切りは蜜の味」なのです。

このように、双方にとって望ましい結果（二人とも黙秘して懲役一年）と想定される結果（二人とも自白して懲役五年）が一致しないのが、この思考実験が「ジレンマ」と呼ばれる所以です。自己の利益を追求して合理的に行動しても結果は最善にならない、という好例でしょう。

では、ジレンマを回避するにはどうすれば良いのでしょうか。例えば、裏切った場合の罰則を事前に設けておけば、裏切るメリットが少なくなるので、互いに黙秘できる可能性が高くなります。また、囚人AとBが固い友情で結ばれていれば、罰則を設けずとも互いに黙秘できるかもしれません。罰則も信頼関係も、相手が裏切る可能性を減らすためには

ある程度有効といえます。

さらに、囚人のジレンマを複数回繰り返すことを考えてみましょう。当初の思考実験のように一回だけ行う場合は自白する方が合理的ですが、これを繰り返して行うとなると事情が変わってきます。繰り返し行う場合、一度裏切ってしまうと裏切りの応酬おうちゅうが続いてしまうため、一時的に協力しておこうという考えが生まれやすくなります。このように、条件や状況次第で結果が変わりうるのがこの思考実験の面白い点です。

応用

前述の通り、囚人のジレンマは多くの学問領域に応用されています。

例えば国際政治学では、「自白しない」を「軍縮」に、「自白する」を「軍備維持」または「軍拡」に置き換えると、二国間の軍縮が思うように進展しない現状を分析できます。互いに軍縮することが双方にとって望ましいものの、裏切られる危険性を考慮するとなかなか軍縮できない、ということですね。その他、先制攻撃の有効性や核軍縮など、さまざま

まな国際政治上の問題を二国間の駆け引きとして、ゲーム理論で分析することができません。また、環境問題の文脈でも、共有資源の乱獲によって資源の枯渇を招いてしまうことが問題視されており、こうした状況は「コモنزの悲劇」と呼ばれます。この分析にもゲーム理論は使えます。

このように、囚人のジレンマは「自己の利益を追求する個々の主体がどうすれば協力できるのか」という現代社会の諸問題を考えるための視座を提供してくれます。

さらに、囚人のジレンマが実際の制度設計に活用されている事例もあります。その代表が、談合を取り締まるためのリニエンスー制度（課徴金減免制度）です。談合などで価格を吊り上げる行為は違法とされ、公正取引委員会が摘発に当たっていますが、委員会の調査前に談合した事実を自白すると課徴金（罰金）が自白した順番に応じて減免される仕組みが導入されています。日本でも二〇〇六年に導入され、それ以降談合の摘発数が増加するという効果を上げています。

思考実験 3

シュレディンガーの猫

二つの状態が同時に存在する？

概要

一匹の猫と、半分の確率で崩壊して放射性物質を出すマイクロな原子が、鉄の箱に入って

います。放射性物質が出されると、それに起因して毒ガスが箱の中で発生し、猫は死んでしまいます。ただし、外からは中の様子がどうなっているかはわかりません。

このとき、猫は生きていると言えるでしょうか？ それとも死んでいると言えるでしょうか？ 箱の中の様子が外から確認できない以上、猫は生きているかもしれないし死んでいるかもしれない、つまり「どちらの可能性もある」という言い方しかできません。観測者が確認するまで猫の生死についてどちらの可能性も残されており、観測者が確認したときに初めて一方の可能性に収束するのです。

背景

この思考実験は、一九三五年にオーストリアの物理学者エルヴィン・シュレディンガーが科学誌上で発表したものです。「シュレディンガーの猫」という名前は、この物理学者から取られています。

この思考実験が生まれた背景には、それまでの物理学（力学・熱力学・電磁気学などのこ

とを指し、古典物理学とも呼ばれます」とは異なる新たな物理学の進展がありました。二十世紀に入ると、分子や原子などのミクロの世界を扱う量子力学の研究が本格化しましたが、研究が進むにつれて重大な問題が生じてきました。光が粒子の性質と波の性質を兼ね備えていることがわかってきたのです。これは、「粒子と波は全く違うものである」と考えられていた古典物理学の常識を根底から覆すものでした。

この問題に、物理学者はどう答えようとしたのでしょうか。ニールス・ボーアは、光や電子は粒子と波の両方の性質を持ち、その性質は観測のあり方によって変化するという説を発表しました。また、ボーアの影響を受けたヴェルナー・ハイゼンベルクも、粒子の位置と運動量を同時に厳密に測定することはできないとする不確定性原理を発表しました。ここで重要なのは、「世界は物理法則によって完全に記述できる」という古典物理学の前提を量子力学が覆そうとした点です。つまり、従来の物理学では「Aである」状態が不変であることを疑わなかったのに対し、量子力学は「AかBかは確率的にしか決まらない」「AかBかは観測するまで分からない」というちゃぶ台返しをしたのです。

もちろん、「世界は一つに決まらない」という量子力学の新たな世界観に全ての物理学者が納得したわけではありません。アインシュタインなど一部の物理学者は量子力学の不完

全な部分を指摘し、ボーアに論戦を挑みました（アインシュタインが「神はサイコロを振らない」と言つて量子力学を批判したとされるエピソードが有名です）。この時のアインシュタインの反論の内容を分かりやすく伝えるためにシュレディンガーが唱えたのが、「シュレディンガーの猫」だったのです。

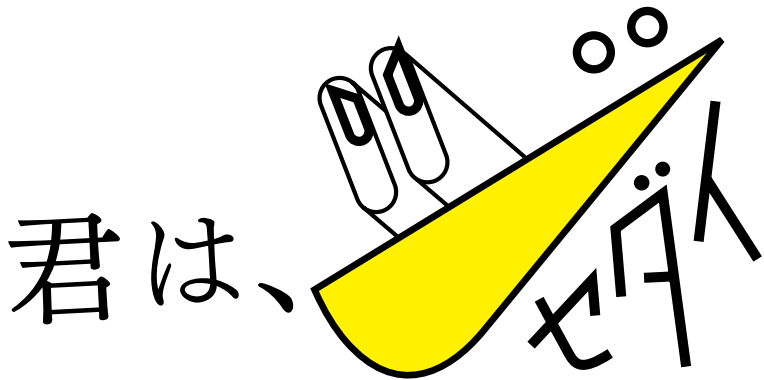
考察

「シュレディンガーの猫」では、観測者が箱を開けるまで猫の生死はわかりません。つまり、観測者が箱を開けるまで猫の生死は決定しておらず、箱が開けられる瞬間まで生きている状態と死んでいる状態が重なり合つて存在しているのです。

ここで重要なのが、「猫の生死は観測する前に決まっていたのか否か」という点です。古典物理学に則れば、観測する前から猫の生死は決まっております、観測はその結果を確認する行為でしかありません。ところが、量子力学の立場では観測と猫の生死はセットであり、観測するまで猫の生死は決まっていないと考えるのです。突飛に思えるかもしれませんが、

この「両方の可能性が同時に存在している（重ね合わせられている）」という考え方が量子力学の核心です。この後、シュレディンガーの猫は、「粒子の性質と波の性質は重なり合った状態で存在しており、それを人間が観測することで事象が収縮し結果が定まる」ということを端的に表す思考実験として知られるようになりました。

なお、この思考実験には後日談があります。実はこの思考実験は、もともと量子力学の不完全さを指摘するためにシュレディンガーが発表したものだったのですが、「確かに面白いけど、結局は単なる哲学論争だよ」と見なされ、長いこと忘れ去られていました。しかし、後にベルの不等式の検証やアスピの実験によって「観測するまで物事の状態は確定しない」ということが実証的に示されると、わかりやすい思考実験として「シュレディンガーの猫」も再び注目されるようになったのです。本来は量子力学の不完全な部分を指摘するものだったはずが、巡りめぐって量子力学の考え方を分かりやすく説明する思考実験として知られるようになったのは面白いですね。



君は、

ジセダイ

何と闘うか？

<https://ji-sedai.jp>

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、**行動機会提案サイト**です。読む→考える→行動する。このサイクルを、困難な時代にあっても前向きに自分の人生を切り開いていこうとする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ
ジセダイイベント

著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月開催中！ 行動機会提案サイトの真骨頂です！

ジセダイ総研

若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

星海社新書試し読み

既刊・新刊を含む、すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

行動せよ!!!